

籠にりんご
テーブルにお茶…

田辺聖子



主婦の友社

(この本の定価はカバーに表示してあります)

籠にりんごテーブルにお茶：

昭和五十年八月一日 第一刷発行

著者 田 辺 聖 子

発行者 石 川 数 雄

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六
電話 二九四―一一一(大代表)

郵便番号 一〇―
振替 東京二―一八〇番

印刷 凸版印刷株式会社

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえます。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

目次

男に甘える	● 5
子供をもたぬたのしみ	● 17
ぜいたくのたのしみ	● 29
食べる楽しみ	● 41
好奇心むらむら	● 53
ねえ、教えて	● 65
海は男、山は男	● 77

けんかについて	89
本をたべる	101
びかびか	113
挫折のたのしみ	125
夕空はれて	137
中途はんばのたのしみ	149
てつぺん	161
ルールのたのしみ	173
旅のたのしみ	185
ユーモアについて	197
一点豪華主義	209
あとがき	221

●装丁 さし絵 灘本唯人

●男に甘える



私の好きなもの。

それは、静かな冬の午後、日がさしこむあかるい部屋で、ぼんやりとひとりいる、読む本はあるのだけれど、べつに読む気もしないからうち捨ててある。

レモンティーをひとりぶん淹れて、その茶碗から湯気が立っている。

スペインみやげにもらった竈に、りんごが四つ五つ、これはむやみと大きいばかりで味がぼやけたような、高価でまずいりんごではなく、カチッと実のしまった小ぶりの、色艶はわるいが、とびきりおいしいりんご。

それらが卓上にあり、私はぼんやりと椅子にかけているか、ベッドで横になり、肘であたまを支えて考えごとをしている、なんて好きだ。

しかし、現実には、こういう清閑はほとんどない、といってよろしい。

かつ、私の住み家は町医者者の診察室の裏手で、身を横にすることもできぬ三畳の仕事場、本と原稿用紙が山積しているから、テーブルもベッドも、もしあれば、紙屑に埋もれてしまうであろう。

かつ、わが家には食い気ざかりの少年少女がたむろしているのだ、りんごが竈の中に原型をとどめている時間は、ほんのわずかの間であろう。

だから、私の好きな光景、風趣というのは、想像であることが多い。

強いていうと、そういう空想をたのしむことが好きだ。

それから、いちじく、これも好き。

薔薇の花とか、川のある風景とか。

花火。

人のうわさ。——あの人とあの人がかうなって、ああなって、そのときあの方は……らしいわよ、なんていう情報交換、これは死ぬまで好きだろうなあ。

ジェラルド・フィリップなんていう、三十六で死んだフランスの男優。これ以上好きな人はもう、出ない。俳優ではいちばん好き。

本では、ラクロの「危険な関係」の中の、おそろしい奸智かんちにたけた、美貌のメルトイユ侯爵夫人。

お酒のむこと。

汽車の旅。

百人一首のうたを思い出すままにあげていくこと。これは、何年やっても、百首全部、おもしろい出すことはむづかしい。全部よく知ってる歌なのに、おもしろい出そうと

すると、必ず、十首二十首は雲がくれする。

そのほか、好きなものは、まだいっぱいあるのだ、ガラスの壺のコレクションとか、シルクデシンの服とか、貝殻のコレクションとか、便箋のコレクションとか、箸紙、マッチ、いやもう、下らぬものを蒐めることにかけては、人後におちない。みんな、好き。

その中で、何がいちばん好きかというと、やっぱり男に甘えることだ。佐藤愛子ちゃんにいうと烈火の如く怒るかもしれないけど。(尤も愛子ちゃんは、この頃はもう、烈女、猛女の代表選手は、上坂冬子サンにバトンタッチするといっていた。愛子ちゃんにいわせると、冬子さんという人は、「敵は幾万ありとても……」という、勇猛果敢な人生観の持主だそうである)

女の最大の幸福というのは、幼なくて親に甘え、結婚して夫に甘え、老いて子に甘えることだと、教える人があった。

もちろん、こんなことをいうのは、たいがい男である。

女がいうはずない。

女にしてみれば、こんなこと、たいへんな屈辱だと思う。かつ、人に甘えて一生

を終るとは何たる不甲斐ない人生であるかと、腹を立てる。べつに、烈女、猛女でなくても、またウーマンリブの闘士でなくても、「そんなナマクラな人間になりたくない」というであろう。

しかし、男、および男の域に近づいた老女から見ると、

「女の一生は、結局、これが幸せなんですよ」

というのは、傍観者だからいえるのである。

私も、若いころは、そういわれて怒っていた。あんまり甘える才能もなさそうだし、第一、甘えさせてくれる人も見付かりそうにない、私はそんなぐうたら人生を送らぬぞ、と心に決めていたのだ。

しかし、人間も、中年を過ぎると、体も保たないことではあるし、甘えたり、おんぶされたりするのがたいへん好ましくなってくる。

おんぶにだっこ、だんだんエスカレートして図にのってゆく、なんていうのは、じつに楽しいことだ。

甘える才能というのは、女なら誰にもあるものだ。それを発見したのも、中年のおかげである。

「甘える」というコトバの解釈がむづかしい。

しく相手のことも考えず、利己的だったり、厚顔無恥だったりしては、これえる」中にはいらぬ。そういうのは、もてあまされるだけである。狎なれく、内側へふみこんできて、何をされても当然みたいなのも、ちょっと、相てみたら困るだろう。

るには、節度も距離感も、要いるみたい。

し、そんなことを、しじゅう計はかっていて、甘えていゝのでは、甘えにならぬ、相手のことを——親にせよ、夫（男）にせよ、子にせよ、愛していれば、相手の立場をいつも考える、するとそれが甘えになつてしまふ。

甘えというのは、本来は、愛することと、同義語ではないのか。

ほんとうに愛していれば、甘えずにはいらぬ。相手の好意や愛を喜んで受け、それによりかからずにはいらぬ。

甘えるのは、相手の愛が信じられるからである。

それに狎なれて無茶をいつてはいけぬ。それは、こちらも、愛してれば、いうは

ずがない。

しかしときどき、無茶を通したくなるときもある。

そこらへんが、人間関係の面白いところである。そうして、相手が親だと、無茶は通るだろうし、子の場合も「じょうがないなあ」で通してくれるかもしれない。しかし、これが男相手だと、バランスがとれないで、突っぱねられるときがある。

甘えて、それが受け入れられて、「よしよし」といわれると、女というのは更に、あつかましくなりたくなるものである。

だいぶん、ツケ上ってるんだ、と自分でわかってても、ツイ、甘えて図に乗りたくなる。今にも怒らないかな、どうかな、などというヒヤヒヤの感覚なんて、じつに楽しいものである。

男というものはオンブオバケみたいなもので、一瞬にして、こわい顔になったりする。

あるいは休火山みたいに、安心して山頂に腰おろしていると、「グワッ！」と噴火して、空中高く吹つとばされるときがある。

男はすべて長いこと、忍びがたきを忍び、堪えがたきを堪えていたのを、一挙

に、爆発させることがある。

予測のつく男もあるが、全然、つかない男もある。

しかし男にしてみれば、これはちゃんと筋道だった論理があつて、破裂したのだ、という。

女は、「そんなことわからないわよ、何を怒ってんのよ」と今更、びっくりしたりする。

そうして、（甘えすぎたかなァー）なんて反省する。

そういうかけひきは、じつに面白いもので、私は好きである。

それから、その爆発、噴火の一手手前まで甘えてきて、泣き落しというのも、私は好きである。

しかし、女が泣いてみせて、それで落ちる男と、落ちない男がある。これも、面白い。

泣いても動じないで、よけい怒ったり、腹立てたりする男と、泣かれると、

「弱いなア」

としよげて機嫌をとってくれる男とある。



尤も、内幕をいうと、私の亭主などは、泣いたってよけい腹立てる部類の男である。私は佐藤愛子ちゃんに、「どうしてかしらん」と聞いたら、

「泣きかたが足りないんじゃないの」

といわれた。

つまり、もう落ちたか、どうかと思つて、泣きながら指の股のあいだの水かきをあげるようにして、相手の顔をのぞいているのなぞ、いけないというのだ。

ヨヨと泣かなければ、いけない。マジメにやらねばならない。

そうして無理を通して道理をひっこめ、「泣く女と地頭じとうには勝てぬ」と男を嘆息せしめねばならないそう。

こういふので面白いと思うのは、女が泣いて、泣き落されていうままになる男、あんがいふだんは、コワモテの暴君タイプに多かったりすること。

反対に平生はやさしくて、物わかりのいい男の方が、女が泣こうがわめこうが、にこにこして動じなかったりして、憎らしいねえ、これは。

いつも物しずかで、やさしいから、女も、甘えていられたのだが、こういう男、芯こゝろはあんがい堅くて、女の泣くのをじつとながめて、鼻紙やハンケチを渡わたし、ときに腕時計に目を落して、

「あ、もうこんな時間！ ハラがすくはずや」
なんていう。

煙草をとり出そうとしてライターをつけたが、あいにくカチカチやっても火が出ない、静かに身軽く立って、次の間からマッチなんぞ出して来て、ゆっくり煙草に火をつけ、ついでに週刊誌なんかバラバラめくる、そういうのが多いものである。

たいがいそこへ、「新聞代！」とか「国民保険でーす」などと集金に來たりして、